
知らない人 知る

はんなりーな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

知らない人 知る

【Nコード】

N9013X

【作者名】

はんなりーな

【あらすじ】

主人公は何かを知る予定です。

この駄作を読んでもださる優しい方々にお願ひするには心苦しいことなのですが、誤字脱字の指摘をしてくださると感謝感激です。

お節介氣遣い

どうしてこんなふうになってしまったのだろうか、ずっと、ずっと考えていた。自分はずまらないものになってしまった。

森の中の、一段と高い木の上から、辺りを見渡す。夜目が効く視界には、寝静まった動物や、細かな木々が鮮やかに見える。そしてその先の明るい町並みも。だが遠い。とても遠い。遠すぎて、そこはあやふやにぼやけている。溜息をつくように、呼気とともに音が漏れ出る。その人外な音響にぞつとしながら、もう一度街灯まばゆい街を眺めて。それから視界を反転させる。街と逆側。山の麓。そこには小さな集落が多数点在している。かつて自分がいた村のような小さな集落。今となっては、そんな小さな集落でさえも、街灯の一つや二つは煌々と照っている。その光が自分の目には眩しすぎて、目がくらむ。昼間の太陽なんか比じゃない。街頭の明かり、家の窓から漏れてくる明かり、そこに確かな生活の跡を見せてくれる光たちが目を突き刺して思わず目を閉じる。視覚を潰す。すると今度は他の感覚が研ぎ澄まされる。気がつくと声が聞こえる。いや、声に気がついてしまった。街から、集落から、人の声がする。それに今となっては夜行性の森の徘徊者の声も『聞こえる』ようになった。一旦意識してしまえばもうそれらを意識の外に弾くのは困難だ。自分の耳が1080度周囲の音をかき集め、吸い取られた音たちはうずまき管を爆散させる。自分の聴覚器が許す範囲のヘルツを限界まで振り切って、自分の意識は溶解するのだ。もう、自己と他の境が分からなくなってきた。三半規管がイカれたか、バランスがとれなくなってきた。倒れないように体全体で軸を戻そうとすると、荒れ狂う音の波の遠くで羽の羽ばたくような音がする。その音がどこから聞こえるのかと首を一回転した後に視界が暗転した。痛覚が麻痺してきたことを自覚して、少しのいらだちと共に唾を吐く。唾は自分の胸ぐらへと落ちてきて、ようやく自分が仰向けに倒れてい

ることに気づいた。いつの間に落ちてしまったのだろう。さっきまでは確かにあの高い木の上で街を獲物よろしく視姦していたはずだったのに。それにしても高い木だ。あそこから落ちたのなら、骨が何本か折れていると見て間違いない。痛覚が麻痺しているから実感が湧かないけど。近くで獣の鳴く声が聞こえる。このままではきつと食べられてしまうだろう。このままではいけない。そう思うほどに周りの音たちが沈黙する。自分の呼気その音たちを蹂躪したのだ。聞けば聞くほど人外な振動を耳に訴え続けている。もううずまき感は一割ほど復活していた。それでも今は聞こえてくるものは自分の声だけ。そろそろこの場所でこの姿でいるのは危険かもしれない。場所を変えるか、姿を変えるか。その二択で迷った挙句、私は前者を選択する。あと10秒もしないうちに獣達は私を食いに来るだろう。その特上な選択肢を度外視する。音は止み、視界が生き返る。聴覚も視覚も元に戻った。ついでに痛覚も超回復に成功している。体を起こして、とにかく上へ逃げよう。獣達の興奮が伝染するようだ。息を吸うと呼気の代わりに笑いが吐き出された。笑いは止まらず、ひきつり笑いが始まる。これではまともに呼吸ができない。酸素が足りない。窒息する。第二の死は笑い死なのか。それではあちらで笑いものにされるな。そんなことをばやけていると、また羽の音が聞こえて、自分の体は空にあった。

今日は朝からついていないと思う。

朝、外に出る頃には雨が轟々と降っていて、俺は傘立ての中の大きくて古い傘と安っぽいビニール傘を一瞥してから、迷わずビニール傘の方を選択した。豪雨には暴風が加勢していて道行く人達を物理的にも精神的にも妨害する。ああ、嫌だ。こんな天気のひとつ日はきつと講義に出てくる人も激減するはず。自分だけ真面目に出席するのが最高に馬鹿らしい。それでも、俺がとっている講義は出席点数がやけに高いので後々レポート等で苦しみたくない自分に見れば、今苦しんで後に楽する、夏休みの宿題を先に済ませてしまう

みたいな心境だ。いくら面倒くさくても、点稼ぎのために我慢せねばなるまい。地道な努力ほど成功へと近づく方法はないのである。と、そんなことを考えていられたのも講義を終えて講義棟から食堂へと移動しようという時までだった。予想通りに空席が多く、講義室の中も講義の内容もスラスラだったのに辟易しながら階段を降りる。透明な自動ドアから外を見てみると、雨が和らいだような気配は全くなかった。大学に来る際に濡れに濡れた靴と靴下の感触を呼び起こすぐちゃぐちゃという音を聞きながら赤外線センサーが自分を認識してくれるのを待つ。ドアが開いた。それから傘も開いた。昼は何を食べようかなどと考えながら荒れ狂う外の世界へと一歩踏み出す。そして突撃してくる暴風。ニュースレポーターが「まともに立ってられないほどの…」なんて言うような状況が何となく分かるな、なんてぼんやり思っているうちに、傘を掴んでいた左手が風の勢いに持つて行かれて、手に持っていた傘は壊れた。具体的には何本かの骨が不自然に折れて、傘が裏返っていた。その間、正しく刹那、一瞬である。…まあ、安物だからな。こんな日にこんな軽装で外を出歩くという自分はなかなかの猛者だったに違いない。後ろに人がつかえていたので体をドアの横に移動した。中に入ればよかったものの、何故か外側に退避している。少々テンパっているのかもしれない。壊れた傘を無理やり畳む。目の前を、さっきまで俺の後ろに控えていた人達が通過していく。彼ら彼女らは今見た光景に笑いをこらえられない様子で、口元と目尻を引くつかせながら俺の前を通り過ぎる。意識していなかったが、そんな反応を見せられてしまうとなんだか急に恥ずかしくなってきた。無意識に視線が下がってしまう。すると、時期は残暑が厳しい9月の中旬だ。通りゆく若者達の服装は、なんというか、露出度が高かった。生足が大胆である。すぐに視線を上に戻した。一瞬緊張した。咎められているはずもないのに、目の前を歩く人達の目に非難の色を感じたような気がする。ここまでビビリだと、若い男として末期かもしれない。しばらくすると、どうやら講義棟から出てくる人の波が過ぎ

去ったようで、俺はまた建物の中へと避難する。外で少し雨にさらされた。服がまだ模様になっている。普段は気にしない程度の被害なはずがなんだか気分が落ち込んだ。傘立てを見ると、破けたり骨が折れたりしたもののしか残っておらず、使えそうな傘は皆無である。加えて、普通の傘立ての隣に位置する、「傘シェア」という看板が付いているゾーンには傘が無い。傘シェアというのはうちの学校で取り上げられている制度で、忘れられて持ち主が不明になったような傘を無償で生徒達に提供してくれるありがたいものなのだ。俺も過去に何度かお世話になったことがある。しかし、今日は俺みたいに傘を粉碎された人が多かったようだし、もともとストックが多いわけでもないのだから傘シェアに備わっている傘がなくなってしまうのも無理はない。仕方が無いので今度は別棟に向かうことにする。ここは無理だったが、別棟に設置されてある傘立てにはまだ傘が残っているかもしれない。講義棟はA〜C棟まであり、各棟は一階がピロティになっていて二階以降が廊下部分でつながっている。雨が地面とほぼ平行にぶつかってくるようなこの天候で、一階の吹きさらしの部分を移動するのは有り得ない。ということで、講義を終えてから下りてきた階段を再び上る。階段を上る際に吐き出される呼吸が普段よりも大きい質量を持っているような感じがする。吸い込む空気も通常より重いのか、肺にどんよりと粘着質のある空気が溜まっていく気がした。棟どうしをつなぐ廊下は両側が窓でガードされているにもかかわらず多少水が入り込んでいたようだ。強風のせいで窓がガタガタ音を立てている。その音にも負けない程の音量で雨粒は窓に打ち付けていて、幅の狭い廊下は軽く騒音状態だった。別棟に到着。さっきまでいたのがA棟で、今着いたのがB棟。ここからまた階段を下りて一階廊下を突っ切ると、右手に傘立てがある。染み込んだ水分と今の気分が若干重い足取りで進む廊下の左右には講義室群が並んでおり、悪天候のせいも、やはりいつもよりは人数が少ないようだ。常なら各講義室に5人やそこらはいるはずの弁当組も、今日は大部分が自主的な判断で休校を選んだらしい。

部屋ごとの状況を眺めながら廊下を歩き、突き当たりまで辿りついて右手を見る。傘立ての中身はどうやら先程と変わらないみたいだ。傘シェアにおいても同様である。ため息をついて今来た道を引き返す。次はC棟に移動だ。C棟の傘立ても同じような状態だったら、諦めて雨の中を走るしかない。こんな天気の中、なんの装備もなしで外に出るなんて、イコールで自殺行為だ。また階段を上って2階からの移動。B棟とC棟をつなぐ廊下も、耳をふさぎなくなるほどに騒音を醸していた。階段を下りてまた講義室の中を覗きながら廊下を進む。今度はさっきよりも人数が少ないようだ。誰もいない部屋のほうが多い。やっぱり、今日みたいな日に生真面目に通学してくる方がマイナー組なのだ。分かってはいたけど、こうして通学してしまった身としてはどことなくやりきれない。眉間の奥にむしゃくしゃしたものを感じながら最後の講義室の前を通過して、右手を見れば。

「あつ。」

傘があつた。正しく「あつた」。というか、今まさに一人の女子によつて最後の一本が傘シェアのコーナーから引き抜かれている瞬間だった。目の前でその光景をまざまざと見せつけられる。焦りに、胸の少ししたあたりがググつとうねりを上げているような錯覚がした。結局傘は手に入らなかった。走って帰るしかない。

と、その時、俺の声に反応したのか、目の前の女子がこちらを向いた。目が大きい。ショートヘアで髪先にシャギーが入っている。快活な印象をつける子だ。その子がまず俺の顔を見て、次に俺が持っている傘を見て、もう一度俺の顔に視線を向ける。そして手先の傘をゆっくり引き抜くと、これまたゆくりとした動作でそれをこちらに差し出す。

「あの、この傘使いますか？」

「え？」

女子の声は思っていたよりも大人で、年齢分の成長を感じさせるものだった。完全に大人というわけではないが、子供には出せない声

調だ。こちらをしつかりと見据えている。とてもきんとした子みたいだ。彼女の印象を修正した所でこちらも彼女を見直してみる。

彼女は、当然のようだが、今手にしている傘以外、雨を防げるようなものは持っていないみたいだった。傘シェアを利用している時点で十中八九はそういう事情であるはずではあるが、念のための確認だ。それから、彼女越しに見える透明な自動ドアの奥の光景は、なんとというか、悲惨だった。あんな所に女子を一人、傘も持たせずに放り出しているのだろうか？いや、疑問符をつけて入るがコレは疑問じゃなくて愚問である。良いわけがない。言い訳も出ない。俺の中の道徳心が猛っている。視線を彼女に戻す。彼女はまだこちらを凝視している。彼女は俺に穴でも開けようとしているのだろうか？「あ、いや、良いですよ。そちらが先に手にしましたし。第一、俺傘持つてるし。」

「でも、その傘…」

間髪入れずに彼女が追撃を入れる。この子はどうやら、俺の遠慮が分かっていないと見える。彼女は休むこと無く俺のことを見ていた。頼むからまばたきくらいはして欲しい。

「大丈夫です。コレ、見た目ほどは壊れてないっすから。そっこのほうこそ、傘持っていないんじゃないですか？」

「それは、そうですね…」

「大丈夫ですって、ほら。」

なおも食い下がる女子のために目の前で傘を広げる。その半分以上は骨が折れていて、一本はブラブラと揺れている状態だったがなんとか傘という体は保っていた。ぎりぎり傘だった。

「まだ使えるでしょ？大丈夫っすから、その傘はどうぞ使ってください。」

俺が傘を閉じる。

「でも、私の方は友達を呼べば何とかありますし…」

…まるで俺に友達がいないか、もしくは読んでもなんともならないような言い分だ。心外だった。失礼だった。そして彼女は真剣だった。

た。彼女は真剣に俺のことを心配してくれていた。俺は彼女に真剣に心配されていた。若干へこむ。それほど俺は友達がいないように見えるのだろうか？それとも俺が持っている傘が原因だろうか？頼むから後者であって欲しいと願う。

彼女の視線が外れない。このままでは押し問答が続くだけだと、俺は思った。仕方ないので、強硬手段にでる。彼女がいる法とは反対側の自動ドア、俺が今までせにしていた方の出口に体を向けた。

「お気遣いありがとうございます。でも本当に、いいすから。外天気ひどいですし、気をつけてくださいね。」

そう言つて自動ドアのセンサーが完治してくれるところに体を置いて、自動ドアが開く。今度は強風に持つていかれないように丁寧な傘を開いた。開いた瞬間、風にあおられて大きく傘がしなった。

「あ、ちよつと待つて。」

後ろで声が聞こえる。半ばそれを無視するようにして外に出た。雨が横から叩きつけられる。コレは傘があつてもなくても、大差ないじゃないかため息を付いた。俺は若干早足で外に出た。

気分が乗らないので学食で昼飯を食べることもなく、家路に着くことにした。早く帰つて熱めのシャワーでも浴びよう。そうしたらきつと気分が紛れる。そう考えながら、俺は雨に打たれていた。傘は指していた。でもやつぱりと言うか、それは傘の役目をほとんど果たしていなかった。右手にはぐしゃぐしゃになつた傘がまとめられている。実は傘はとくに大破していた。学校からアパートまでの道のりの、ちょうど半分ほどのところにあるコンビ二の手前で、タイミングよく壊れたので、俺はコンビ二で新しい傘を買つて、今はそれをさしている。コンビ二で買った傘は大破した傘と全く同じものだったが、やはり新品という点で強風に対抗する何かしらを持つているようだった。晴れていたならば、あと5分は早くつけたであろう住まいが視界に入つて、もう少し、という気力がわきあがつてきた。風に煽られる体を踏ん張る。もうボトムスは濡れだつ

た。

ぐちゃぐちゃという音を立ててアパートの、2階の通路になっている部分の下へ避難に向かう。そこには誰もいないようだった。少し早足でそこに入り自分を見ると、状況は無惨だった。体中、濡れていない所がなかった。でも、そのことが逆に、大学であのシヨートヘアの子に傘を譲ったという事実を、何処か誇らしいようなものにしてくれるような気がした。俺は良い事をしたんだな、と感じる。大分自己満足ではあるだろうと理解はしていたが、それでも、この悲惨な天気の中ずぶ濡れになって帰ってきた身としては少しくらいはあの時の自分を誇っても許されるのではないか、という気分になっていた。避難したアパートの雨よけ部分で1つだけ深呼吸する。この荒れた天気の中、やっとの思いで帰ってきた達成感がにじみ出るようだった。

- - - バサツ - - -

その時、後ろで何か、羽音が起こった、気がした。鳥、だろうか？こんな雨の中？そう考えて後ろを向く。その方向はアパートの2階部分へと続く階段がある方向だった。俺の部屋はアパートの3階だ。するとそこには、女の人が立っていた。知らない人だった。このアパートの人ではなかった。我が目を疑う、と言うか、先ほどの自分を疑う。どうしたのだろうか？さっき、俺が見たときは、雨よけにはだれもいないと思ったのだが…。

その人は、丈の長い白のスカートに、それに映えるような緑のサマ―セーターを着込んでいた。風がスカートを激しく暴れさせていた。思わず、風が見せる彼女の膝に目をやって、心臓が跳ねるように驚いた。丈の長いスカートというのは、ミニスカートよりも断然扇情的に感じてしまう。彼女は、被っている麦わら帽子を右手で抑えていた。そして、彼女の首からは、もう2つの麦わら帽子が背中の方に流されてあって、紐で首にかけていなければ、今すぐにでも飛ん

で行ってしまいそうな勢いで暴れている。どうして麦わら帽子を3つも身につけているのか、という疑問はあるにはあるが、何故かそれはそれで完成されているように思い込まれそうだった。

全体的に何かぼやけているような印象を受け、不思議な印象に目をひかれるのだが、彼女が全く濡れていないというのが、どうにも不思議だった。

ふと、彼女がこちらを向いた。

彼女の目に、射ぬかれる。

「あ、あの！」

気づけば声が漏れていた。声が漏れる、という表現ではいささか不適切なほどにその音量は大きかったが。彼女は俺の声に反応を示さず、視線を動かさない。

「あの、雨宿り、ですか？」

今度は、彼女と自分との距離に適した音量が出た。その声に、彼女が反応する。まず、自分の後ろを振り向いて、それから前に向き直り、焦ったように左手で自分の顔を指す。

「え…私？」

彼女の声は実に彼女に似合っていた。彼女に合う声調だった。その女の人が声を発するのだとしたら、この声以外はありえない、というほどじっくり決まっている。その声はとても驚嘆に満ちていた。まるで自分に声かけられるという事実がありえないと信じきっているかのようなだった。俺が頷く。彼女は更に驚いた。

「あの、傘とか、持っていないみたいでしたから。」

自分の声が、自分に不釣り合いなほどに硬質なものになっていると思った。どうしてか、緊張している。興奮と言っても良かった。どうしてかの理由が、分からない。それなのにその興奮が、妙に納得できる。

目の前の彼女が困ったような目を向ける。

「ああ、そう。雨宿り…かな。うん、そう。」

彼女が微笑する。自分の心が弾んだ。心なしか、彼女も嬉しそうな

表情をしていると思った。

何か、何か会話を繋げなければならぬと直感する。彼女とつながりを持たなければならぬと思わされた。そうして焦れば焦るほどに、自分の頭は冷静に混乱した。どうして、俺は目の前の女性に対してこんなにも執着をしているのだろうか？そんな問いが、冷静な自分から送られてくる。しかし、その衝動の波が止むことはなかった。何かが突き上げてくるかのように俺は焦って、何か、何かないかと探して、手元の傘を差し出した。もちろん、今買ってきたばかりの新しい傘をだ。

「良ければ、これ、使ってください。」

まるで外人の片言だな、と自分を格好悪く思った。滑稽だ。彼女も、何処か困ったようなものに表情を変えている。

「いいんです。どうか、お氣を使わないでください。」

彼女は胸の前で遠慮の意味を込めて左手を振る。右手はずっと麦わら帽子を抑えていた。風が強い。

「でも……」

なおも食い下がる自分が、明らかに変であるとわかるほどに積極的なのを頭の隅で自覚して、それから、この状況がまるで先ほどの再現であるということに気がついた。俺自身が先ほどのショートヘアの彼女で、麦わら帽子の女性がさっきの俺。それに気づくと、とたんに強く出られない、体がすくむ。こんな無理やりな押しではない。頭が回る、回る。頭を回転させようとすればするほど、それは何かしらの糸口をたぐり寄せる思考ではないのだという意識が沸き起こり、焦りを煽る。間をつなぐために頭をかく。それでも、不自然だと思えるくらいの時間が過ぎてしまった。

「あの……」

女性特有の高さを持つ、それでいて心地よい安定感を感じさせる声があった。視線を上げる。困ったような表情が目映った。

「私のことは気にしないでくださいそれよりも、びしょ濡れじゃないですか。風邪を引かれますよ？」

半歩身を引いて、階段への道を開けてくれる。狭い雨よけでそうすることで、彼女は少々雨に打たれるような位置に移動することになるはずだ。雨よけの、雨にぬれて色が変わっているコンクリートのところへ足が置かれる。彼女は夏の涼しい靴を履いていた。

「どうぞ。」

階段の方へ、左手を差し出す。早く行け、という意味だろう。右手は相変わらず麦わら帽子を抑えていて、首にかかっている二つの麦わら帽子が風の酷さを視覚に訴えてくる。彼女にそこまでさせて、俺は急な恥ずかしさを覚えた。さっきまでの自分がとても身勝手に感じた。顔を伏せる。

「あ、じゃあ。…ありがとうございます。」

ここは、無理を通すことはできないと、思った。顔を伏せたままに、よく頭が働いていないまま早足で彼女の横を通り抜ける。その際に、彼女の顔は見られなかった。きつと、困った顔をしている。おせっかいな自分に対して、無下に断ることもできない優しい人は、きつと困っている顔をしているだろう。そう思うと、とたんにこの場から逃げ出したくなって。

俺は階段を駆け上がった。

そして、駆け上がる音に紛れて一瞬、「ごめんなさい」という心地よい声が耳に届いた錯覚がした。

ボタン

部屋のドアを乱暴に閉め、濡れた服を気にせずに狭い台所を進んで居間へ。ソックスがじゅっじゅっ、という音を立てている。背中のバッグを雑に放置して、それから体にしつくくへばりつく服を何とか脱ぎ切ると、風呂場の戸を閉め、熱湯の方の蛇口を回す。最初の方は冷たいままのシャワーが熱を持ち始めた所で調整のために冷水の方の蛇口も回した。まだ少し熱すぎるような気がするシャワーを、打ち付けるようにして頭からかぶった。冷えていた体にはやはり熱

すぎた熱湯に、体が過敏に反応するのを無視して、俺はシャワーを浴び続けた。しばらくしてからうつむいた状態で洗面器に座る。

「…熱い」

滅多に言わない独り言が自分を動揺させた。

気になる視線（前書き）

誤字脱字はご指摘いただけると助かります。

気になる視線

翌日。朝。体とともに頭が起きることは無く、目が覚めた後に幾分かの時間を要した。眠い、わけではなかったと思う。耳の後ろの方の後頭部が血を溜め込んでいるかのように頭が鈍い。昨日のことを思い出したのだ、と思った。そのことに思い至ると、急に頭が覚醒する。いったい、自分はどうしてこんなことに思考を費やしているのだろうか？と、疑問が頭をよぎる。もう、あの麦藁帽子の女性と会うことなんて、もうそうそう無いだろう。自分は何を気にしているのだろう。この広い街の中、俺の対人キャパシティを加味すると、昨日のような偶然はそうそうないはずだ。偶然、そう、偶然なのだ。そう思うと、どこか悔しさのようなものが浮かんできて、その感覚自体に舌打ちをした。舌打ちをしてはつとす。どうやら俺は想像以上に苛ついているようだった。遮光カーテンを開ける。光と共に曇天が広がった。空が重い。頭の鈍さが気にかかる。朝風呂でも浴びればこの鈍さも収まるだろうか。そう思って、直ぐに行動に移し、温度を下げたシャワーを浴びた。体がさっぱりしたものの、期待ほどの効果はなかった。昨日とほとんど変わらない荷物で外に出る。出掛けに新品の傘を手にとって、階段をゆっくり降りる。階段を全て降り切るという時に、心臓がどきりと動いて、それを自覚すると同時に一気に足を進めた。階段を降りたそこには誰もいなかった。またイライラが募る。このいらつきの正体が実際にはわかっていくくせに、それを認めることは許せなかった。足は自然と早足へ。しかし時折、息が詰まったかのようにそれが止まる。そうしていつもと同じどおりの時間帯に大学へと着いた。

大学に着くと、この曜日の1限の講義と一緒に受けている友達と合流した。その友達は学部も違い、サークルも違う。大学に入学してすぐの講義、内容はオリエンテーションのようなものだったと思うが、その講義で隣に座ったというだけの関係だ。それでも、大学も

後期に入ろうかという今の時期までそいつとの友人関係は続いている。きつとこの後も続くだろうとなんとなく思う。気の置けない、というほどではないが、それでも気を使うことは多くはない。そんな少し置き過ぎているような距離感が続いているのが心地よい。この曜日の1限目はその距離感を楽しむために来ているといっても良かった。

講義教室の中ほど、廊下側の3人席を二人で占領して座る。この講義はそれほど受ける人数が多くないので、これくらいは余裕で許される。講義が始まるまで10分という所だった。暇をもてあましてしまう。こんなとき、一つ席を空けて隣の友達と会話するという手段もあるが、それはどうにもはばかられる。そのようにして積極的に話をするというのは、いや、目的を持って話をしようというのは、俺が望んでいる距離感を壊してしまうもののようなきらいがあった。そこで教室をボーッと眺めることにしてみる。ちょうど女子の集団が教室に入ってくるのが視界に入った。興味がなかったので視界に入れることもなく、また視界から無理にはずすこともしないで、ただ、その集団が通り過ぎるのを待つ。

(…あ。)

女子の集団が視界の中央付近に入ってきたとき、その集団の中の一人と目が合った。それは昨日目にした顔だった。シャギーの入った髪の毛、快活な印象を受ける女の子。それは昨日の帰り際に、学校で見た女子だった。快活な印象を放っていた彼女は、今はおとなしめの配色でコーディネートされた服装をしていて、それが彼女を大人らしく見せている。その彼女が、昨日と同様に、こちらのほうを目を皿のようにして見ているのだった。俺の後ろの誰かを見ているのかと一瞬の期待を持ったが、壁際の席ではそれはありえない。彼女は間違いなく、一切の疑いのない様子でこちらを見ていた。きつと向こうはこちらと目があっているのに気づいている。気づいていてなお、視線をそらさない。戸惑った。そして困った。困惑した後、俺は視線をはずして前を向いた。確かバッグには読み途

中の新書があつたはずだ。それを読んでいよう。

自分がどうして困惑しているのか、肝心な自分がわかっていなかった。しかし、彼女を見ると、あるいは彼女に見られていると、なにか落ち着かない。彼女は何か、俺の知らない場所で俺の秘密を知っているかのように、俺を見透かしているかのように俺のことは見るのだ。十分に妙な恐怖だった。見ず知らずの女子にそこまでの恐怖を感じるというのは、今までない経験だ。彼女は どうしてそんなふうに俺の事を見るのだろうか。俺の記憶に、該当する理由、きっかけは見当たらない。そも、彼女とは昨日が初対面なのだ。何度考えてもそれらしい理由がわからない。しばらくして授業が始まる

講義の内容は退屈だった。最初のほうこそ、斜め後ろのそこそこ近くの席まで接近してきた件の女子に気を持っていかれそうになったが、時間が経つにつれて講義内容が程よいテンポの音の羅列へと変わっていく。心地よいテンポは睡眠にはうってつけで、十数分の睡眠と、その後のまどろみを提供してくれる。俺はそれを甘んじて消費することで、この講義を乗り切ることにした。

講義も終わろうかという頃、タイミングを見計らったかのように目が覚める。講義は今回の内容のまとめに移っているところだった。まとめの部分をルーズリーフにさらっと移していると、講義の終わりのベルが鳴る。講義が終わってから、件の女子が何かコンタクトをとってくるとかいう事は無く、彼女は、彼女の友達と連れ立って講義室から出て行った。こちらは席を立たないまま、再び取り出した新書に没頭するフリをしてやり過ごしていた。そのフリをしてやり過ごす間に、一度だけ彼女のほうに意識を持っていくと、彼女がそれに気がついたかのようにこちらを見た気がした。が、多分気のせいだと思う。

その日は二コマ目の講義はを取っていないので俺は友達と別れた後、時間をつぶすために大学の付属の図書館に向かう。そろそろ赤や黄色が混じってもよさそうなものの、周囲の木々の葉は全てがみずみずしい緑色だった。図書館に向かうには駐輪場からのルートと、公

道からまっすぐに入っていくルートの二つがある。俺はたいていの場合駐輪場のほうから図書館へと向かう。こちらのほうは原付二輪車やら自転車やらでごちゃごちゃしているものの若干距離を短縮できるからだ。俺にとって駐輪場程度の煩雑さは苦にならない。両側に隙間なく並べられている自転車の通路を抜けて、左へと曲がるとそこに図書館がある。曲がり角へとさしかかるうとして、そこで俺は足を止める。

(…またか…)

そこにはまた、シャギー髪の女子がいた。今度は一人でいるようだった。図書館の入り口の前で携帯を眺めている。大人の雰囲気を感じさせながら立っている姿は実に魅力的な女性のように思える。しかし、どうしてか、自分は無意識にその彼女の事を避けたがっているようだった。

暇をつぶすために図書館に入りたいが、そうしたら絶対にあの女子に見つかるだろう。それはなんとなく嫌だった。いや、嫌というわけではないのかもしれない。ただどうしてか、妙な焦燥感があるのだ。これ以上彼女に近づくことに、俺は頭の中のどこかでおびえているのだ。そして全力のアラームを鳴らしている。アラーム音は、その振動が脳みそから飛び出して、心臓を打ち鳴らすほどのものだった。

足を止めた位置から反対方向へと向き直る。今日の暇つぶしは学食で本でも読むことにした。

学食は程ほどに混んでいた。最高に混む時間帯は昼ごろなのだが、うちの大学の学食は大変に繁盛しているらしい。許容できるほどではあるものの騒がしい食堂内で本を読むというのに少々の抵抗を感じ、それでも図書館に戻るということは無かった。渋々といった感じの足取りで食堂入り口のドアを抜けると、今度は早足で空いている席へと移動する。どう考えたって食堂内の学生たちは俺のことなんて眼中に無いだろうと思うのに、それでも、騒がしい場所に一人でいるというのは逆目立ちしている気が抜けなくて落ち着かない。

拳動不審な目が忙しく左右を見渡す。窓際の席の中ほどに、4つほど連続して空いている席を見つけた。テーブルとテーブルの隙間を縫って目的の席に到着。右から二番目の席を取って左の席に自分の荷物を置く。こうすることでさりげなく隣の席の使用を妨げる。知らない奴が隣に座っているというのは居心地が良くないという理由からの対策だ。満席のときはそれもはばかられるが、そういう時はたいてい知人と一緒に宅を囲むのでわざわざそんなことをすることも無い。一息ついてバッグから新書を取り出した。本を開く。開くが、頭に文字は入ってこない。いつの間にか文字の羅列を追うばかりの作業を続けてしまい、気がつけば内容もわからないままにページの半分ほどを読み損ねていた。

(……はあ……)

どうしてか集中できない。どうしてか調子が乗らない。原因はわかっているのだ。それはきつと、あのシャギー髪の女子に関わっているに決まっている。でも、原因は彼女じゃない。それは自分自身であると、そこにいたるほどにはつきりする責任が、妙に自分を安心させる。誰も悪くはない。自分が悪いのだ。いや、自分も悪くはない。ただ、責任は自分にある。昨日の一件、少々強引に彼女の好意を無碍にした。そして、そのあとすぐに、彼女の心境を知ることになり、俺はどうやら彼女に引け目を感じているのだった。なんとも小さい、しょぼい理由だ。そんなことで、俺は彼女を避けているのか。本当に小さい。俺は小さい人間だ。そう感じることに、胸のいらいらは消えていく。誰のせいでもない、自分が悪い。そう自覚することで、自分のあり方が明確になってくるようだ。今度、彼女に会ったら、お礼でも言うべきか。左手がページを進めていることに気がつき、また内容が頭に入っていなかったことを知る。それでも気にせずに、今度は先の1限の授業を思い出す。彼女は明らかにこちらに気がついていてる模様で、もしかしたら、向こうもこちらが気がついていてること事態に気がついていてるのではないかと、そう思った。そして、その確率はさほど高くないにしろ、無視できるほど低

くもないのだろうと考える。そうだとしたら、もしかすると彼女は、俺がシカトを決め込んだとでも勘違いするのではないだろうかと思っただ。実際、勘違いというほどそれは事実と相反してはいないが、それでも、その言葉に含まれる心持というのは、実際のものとはかなり違っている。俺は彼女に対してなんら悪意はなかったはずだが、それでも『シカト』とはそういうように見られることを、俺は知らないわけではない。だから、彼女はきつと、俺が彼女に対して何らかのマイナスの気持ちを向けているのではないかと感じて、それは無理からぬことなのではないかと、ぼやと思った。そう考えると、彼女に対する引け目というものはさらに大きなものになり、その引け目から、俺は彼女に対して話しかけるということ、御礼を言うということに緊張を覚えてしまうのだろう。そこまで自分を分析して、それが良くない事だと分かって尚、自分という人は行動を起こす人間ではないという結論に最終的に至ってしまう。自分という人間は本当に小さいな、と感じる結果になるのだった。

そして懸念は現実になった。俺は彼女に対してお礼を言うことができないでいた。苦手意識というか、引け目を感じているという自覚を持った後には、自分の中での彼女の印象が濃くなってしまうように、その後、彼女の姿を頻繁に目にするようになった。同じ日に、同じ授業を取っていることも少なくないようで、どうやら彼女は自分と同じ学部に所属しているのだった。彼女の方は相変わらずの反応で、こちらを目にしては、ずっと、じつと凝視してくる。その目にあまりにも大きくて丸いので、まるで梟のようだなと思った。その目に何か言い知れぬプレッシャーのよなものを感じて、俺はまず彼女に接触することに関して緊張を覚えてしまう。何度か目が合ったこともあったので、きっと彼女はこちらが気がついていて、ということを知っているのだろうと考えるが、それでも行動しない俺に対して彼女は何かマイナスの意思を感じているのかというと、それはまったく分からなかった。分からないほど、彼女の行動は常に一貫しているのだ。変化がないというほうが正しいかもしれない。

とにかく、仰々しい状況分析を簡潔にまとめるとすると、俺と彼女の間には、出会った翌日の1限の授業とまったく同じものが隔たっているままということだった。

2週間がたち、どう考えても御礼を言うタイミングは逃してしまっているのだが、こちらに対する行動を一貫する彼女に対して、俺が感じる引け目というものが収まることは全くなかった。それでもある程度の慣れを感じてきていた俺は、なんとなく彼女に鬱陶しさも感じていた。俺がコレほどにも氣まずさを感じているというのに、彼女はそんなことは知らないとも言っような振る舞いだ。それなのに、彼女の方から何か接触があるかといえばそんなことは全くなく、ただただ見てくるだけなのである。こちらからの接触を催促しているかのように、彼女の行動に若干のいらいらを感じてしまうこともあった。そんなことを考えてしまうのは、きっといつもと同じ被害妄想なのだとわかってはいるのだが、それでも無理やり俺の意識の中に入り込んでくる彼女は、どうにもやりにくさを感じてしまっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9013x/>

知らない人 知る

2011年11月23日16時51分発行